松原の憶い出

ー六十年前の松原の日々ー

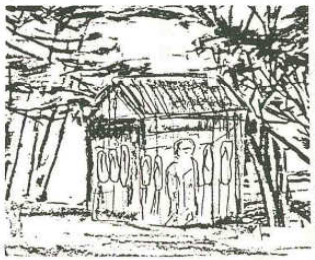
宮田町一ー十五ー一　池井　正一

帷子宿

鎌倉古道で、室町時代から宿駅となっており、今の松原商店街の通りは江戸時代の東海道保土ケ谷宿の入り口に当たる、ー保土ケ谷宿は江戸より四つ目の宿場で、保土ケ谷、帷子、岩間、神戸の四村から成り、天保十四年、戸数五五八、本陣一、脇本陣二、旅籠六十七軒を数える。江戸より八里（三二キロ）、一日で歩けるので、泊り客が多く、賑わった宿場町であった。今でこそハマのアメ横といわれている松原商店街ですが、六十年前の松原の追分はどうだったでしょうか。姉とも話しながら、私の住んでいた所を中心に昔の記憶をたどってみました。古い町並の地図も書いてみましたので、それを見ながら読んでみて下さい。松原は旧東海道の保土ケ谷宿の丁度入り口にあたるところでしたから、宿屋が多く、夕方になると越中屋、中田屋、三州屋、三浦屋に、諸国旅人御宿と書いた行燈がともりました。天野さんの馬屋から夏の終り頃は蝙蝠が空に舞い上り、追分の角けいさんの安い雑貨屋へ買物に行く人が足早に通り、旅役者、富山の薬売りが宿屋に入って行きました。朝になると、またガラガラと音をたて馬が行きかい、その音で目が覚めたものです。醤油屋からはよい香りが流れ「あさりー　しじみ」と売り声がし、豆腐屋のラッパが聞こえ、とてものどかでした。松原の名物は按摩の与一とはなれ瞽女でした。与一はからかわれると杖をふりまわしてたいへんこわかったものでした。祖母に按摩をいじめるとたゝると叱られました。

瞽女はおハコの「草津よいとこ一度はおいで」と三味線をひき、とびはねながら歌ってお金をもらっていました。羅宇屋（煙草のキセルの竹の部分を替える商売）がピーピーと鳴らしながら通る。定斉屋（薬売）が薬箱を天秤棒でかついで、箱の引出の鐶をカチヤカチヤさせながら通ると、外にとび出してみたのを憶えています。祖母がこの頃定斉屋がこなくなったねといっていましたから、当時既に少なかったのではないでしょうか。向かいの提灯屋のおじさんがメガネを鼻の下におとして「祝入営〇〇君」と書いており、そばに弓張、高張、小田原提灯など赤く塗られたのが、にぎやかにならんでいました。

「角ケイ」さんの向いにお地蔵様があります。このお地蔵様は今もありますが、とても古くて東海道を旅する人たちの足を守るといい、無事に旅を終って通る時、お礼にわらじを上げたそうです。いつもお堂の中には大きな長いわらじがぶら下っていました。その隣はどぶろく屋、其の先に染物屋があって、上は今も同じ洪福寺の墓地です。その頃は青々と大木が生い繁り、ふくろうの鳴き声が家迄聞えました。山下の道を十六号線の方に向かって行くと子育地蔵様があります。とてもボタ餅が好きで、別名ボタ餅地蔵さんと呼んでいます。私の弟が幼くして亡くなったので月の四日に母はよくボタ餅をもってお参りに行きました。当時の交通機関は人力車が中心で、わずかに相武バスが今の「松原商店街」を通っていました。厚木から横浜間です。その頃はどこでも手をあげれば止ってくれたそうです。荷物の運搬は前にもいったように馬車がほとんどで、馬屋が六軒もあり、今の山田燃料店は元は馬の飼葉屋でした。そして馬を供養する馬頭観音の石仏があちこちにありました。



当時は今とは比較にならないほど貧しく。私の家は米、酒を売っており、炭や食品なども商なっていました。夕方にな